

三池炭鉱専用鉄道

三池炭鉱専用鉄道の最初の路線は、1878 年に大浦坑と大牟田川の間の 2.7 キロメートルに敷設された。1891 年に蒸気機関車が導入されるまでは、列車は馬が牽引していた。1905 年には、炭鉱と海岸の間の丘陵地帯を貫き路線は三池港まで延長された。1923 年には全線電化された。1964 年から 1984 年にかけては、炭鉱労働者や通勤客の足として利用されていた。

三川坑に展示されている機関車は、鉱山で使用されていた列車の進化の過程を示している。最も古いものは、1908 年製の米国製 15 トン級電気機関車である。その他には、1911 年製造のドイツ製 20 トン級機関車、国産最古の電気機関車である 1915 年製造の三菱重工業製 20 トン級機関車、閉山まで活躍した 1936 年製造の東芝製 45 トン級機関車などがある。

現在、大牟田市内には、かつての鉄道敷跡やレンガ造りのトンネル、鉄橋などが残っている。宮原坑や宮浦坑、三池港近くの旧税関などでは、鉄道の枕木や鉄のレールを見る事ができる。

2015年、三池炭鉱専用鉄道はユネスコ世界遺産に登録された。